

Color Gallery

ヘッドライン

人物化学史：燃焼編

先人たちはものが燃えることについてどのように発想し、実証し、理解を深めてきたのだろうか。化学史研究の第一線で活躍する研究者の皆さんに、化学史のなかで特に燃焼にかかわる重要な役割を果たした人物について紹介していただいた。

◆「ベッヒャーとシュタール：原質説とフロギストン」吉本秀之

ベッヒャー（左図）のアイデアに基づき18世紀初頭シュタール（右図）がまとめあげたフロギストン説とは何であったのだろうか？ラヴォワジエによる化学革命は、それまで流布していたフロギストン説を新しい酸素説で覆したのである。P372-375



◆「プリーストリ：「酸素の発見」と燃焼の本質」河野俊哉

「燃焼の本質」、「発見とは何か」、そして「発見者とは誰か」についての理解を深め、「酸素発見競争の現在」ともいうべきものを、プリーストリを中心に紹介していく。P376-379

◆「カール・ウィルヘルム・シェーレ：もう一人の酸素ガス発見者」

内田正夫

シェーレは薬剤師を職業とするかたわら、酸素ガスをはじめ塩素ガスや種々の有機酸など様々な単体や化合物を発見した。化学の記載的段階を象徴する多彩な発見者であったシェーレの業績を紹介する。P380-383



◆「ラヴォワジエ：燃焼現象の解明と酸素の本質」吉田 晃

ラヴォワジエの出発点は、1772年のリンと硫黄の燃焼実験であった。燃焼現象解明の鍵となったのは、質量の変化に着目したことであった。酸素の化学的性質を探求し、さらには呼吸の本質まで明らかにしようとしていた。P384-387